
狩獵物語

ゴルゴダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩猟物語

【Nコード】

N2091BA

【作者名】

ゴルゴダ

【あらすじ】

ふと目を覚ますと、そこは森の中。

人間としての記憶を持っているのに、姿は獣になっていた！？

見た目は肉食獣だけど、心の中は臆病な人間！？

そんな獣の狩猟物語！

テンプレなお話を目指したいです。

小説初心者で稚拙な文となりますが、読んで頂けると嬉しいです。

序章に入るまでに、後数十話は掛かりそうですが頑張ります。

プロローグ

一体、どうということだろう……。

何度考えても答えは出ない。それでも、考えずにはいられなかった。目が覚めたとき、目に映るのは青々とした草木だった。森の中なのだろう、見渡す限りに生い茂っている。

何故、自分は森の中にいるのだろうか……と、そう考えたとき、自分が何なのかが分からなかった。常識……と言えば良いのだろうか、森や草などについては分かる。此処が何処なのか、何故いるのかは分からないが、森の中にいる、と言う現状だけは理解できる。

だが、自分が何なのか？　と言うと疑問には答えられない。それでも、どうにか記憶を探り続け、自分が人間だとは思いつくことができた。だか、やはり此処が何処なのか、何故いるのかは分からなかった……。

暫く考えてみても、何も思い出せない。とりあえず、喉が渴きを訴え始めたので、水を捜すことにした。耳を澄ませば、水が流れる音がする。その音に向かって行く。

ズシンッ！　ズシンッ！

何故だろうか？　一步を踏み出す度に、地面が軽く震える。それに、心なしか視線が高い気がする。

記憶が無いため自信が無いが、人間が歩くだけでは地面は震えないと思う。それに……人間は四つん這いで動く物だったのだろうか？　嫌な予感がする。その予感が何なのかも分からない。視線を下に向け、地面を踏み締める手を見る。……そこには確かに手が在った。

だが、自分が想像していた手ではなかった。

……腕は黄色っぽい鱗のような物に覆われていた。先の方は鋭利な刃物を思わせる鋭い爪が生えている。そのまま二の腕に視線を上げていくと、肘の部分には真っ白な毛が生えている。その毛より上は青い……いや、蒼い鱗に覆われていた。

……頭が働かない。何だこれは？ 自分の中の常識では、人間はこんな腕はしてはいない筈である。

だが、今、自分の目に映る腕は鱗に覆われた姿を見せている。

……怖い。そう思ってしまうのは仕方がないだろう。

目を覚ましたら見知らぬ場所にいた。更に自分の常識では有り得ない姿に自分が成ってしまっているのだ。これで恐怖を覚えない筈がない。少なくとも、自分は恐怖している。

あれから暫く、自分の身体を観察してみたが、見える範囲は全て蒼と黄の鱗に覆われていた。四肢には鋭利な爪が生えそろう、更に尻尾まで生えていた。自分に尻尾が有ることが信じられなかったが、下半身に力を込めるとピコピコと動いた。認めたくないが、やはり自分の尻尾らしい。尻尾も黄色の鱗に覆われており、やけに刺々しかった。

更に暫く身体を動かしていたが、再び喉が渴きを訴え始めたので、今度こそ水が流れる場所に向かう。

ズシンッ！ ズシンッ！

地面を震わせながら、水の有る場所までたどり着いた。小川だったらしく、木々の隙間から差し込む日の光を受け、キラキラと輝いている。その美しさに少しだけ感動しながらも、水を飲もうと水面に顔を近付ける……。

自分の身体を確認したときから分かってはいた。それでも、やはりショックを受けた。

水面に映る自分の顔は獣の顔だった。大きく裂けた口からは鋭い牙が生えている。その口の裂け目から下半分は黄色い鱗に覆われ、上半分は蒼い鱗に覆われている。本来は見る物全てに恐怖を刻み込むだろう二つの瞳は、今は深い哀しみを帯びている。そして蒼い鱗に覆われた頭からは二本の黄色っぽい角が生えていた。

もはや、納得するしかないだろう。自分が人間ではなく、獣である
と……。

獣の本能、人の理性

あれから暫くの間、茫然としていたが空腹から行動しなければならなかった。

獣とはいえ、……いや、獣だからこそ食欲と言う欲求には逆らえなかった。とりあえず、水で少しでも空腹を誤魔化し、その間に食べ物を探すことにした。

暫く探して、漸く獲物を見つけた。全体的に丸みを帯びた鳥だった。浅瀬で虫を啄んでいるようだ。捕まえようと思いゆっくりと近づく。

……踏み込めば爪が届くだろう距離まで近づけた。この獣の身体で腕を振るい、爪で切り付ければ殺せるだろう。

そう……、振るえばいい。振るうだけでいいのに、身体が動かない……。早くしなければ逃げられてしまう！ 仕留めろ！ と獣の本能が叫ぶ。でも、動けない。この身体では可笑しいのかもしれない。それでも、人間としての理性が生き物を殺すことを怖がっている。人間では無い、獣の姿なのに……。なのに、心は人として存在する。酷く歪で滑稽である。

「グルルウ……」

自嘲するかのように喉が鳴る。その唸るような声で丸い鳥はこちらに気づいてしまった。びっくりしたように一鳴きすると、丸い身体を左右に揺らしながら、

ボテボテと逃げていく。

……とても追い掛ける気にはなれなかった。追い掛けても、きっと自分は殺せないだろう。きっとまた、殺すことに恐怖して動けない筈だ。

「グルルウ……」

項垂れる自分の喉がもう一度鳴る。今度は自嘲の他に、水で誤魔化した空腹感が主張するかのように……。

お腹が空いたな……。

獲物を殺せないのなら、何か木の実やキノコでも探そうか……。見た目は肉食獣にしか見えないのに、草食か……。気落ちしながらも探しに行こうと項垂れていた頭を上げる。

と、さっきまで丸い鳥がいた場所に、白くて丸い物が落ちている。

何だろうか……？

近づいて見ると、それは卵だった。何故落ちているかは分からないが、今は素直に喜んだ。草食を覚悟していた自分にとって、貴重な肉だ。厳密には肉とは言えないかも知れないが……。

とりあえず、今日はこれを食べよう！ ……少しだけ、気持ちが上が向きになった。

その後、数日の間、あの丸い鳥を観察していたところ、幾つか分かったことがある。

まず、あの丸い鳥は飛べないらしい。何度かこちらに気づき、驚い

て逃げる際に、一度も飛ばなかったからだ。……あの羽根は飾りなのだろうか？ 逃げ方は必ず地面を走っていた。……走るのも遅く、ボテボテと走っていた。試しに追い掛けてみたら、余裕で追い付いた。……何だろうか。やるせなさを感じた。

次に気づいたのは卵についてだ。脅かすつもりはないが、こちらは見た目だけは肉食獣である。大きさも数倍は有るだろう。そんな獣が近くにいたら、それはびっくりする筈だ。自分もこんな獣がいたら腰を抜かす。……まあ、自分がその獣だが……。

……閑話休題。

卵についてに戻るが、あの丸い鳥は驚いた際に卵を産み落とすらしい……。その事実を知ったこちらが驚いた。……どれだけ驚いているのだろうか？ あの鳥たちは……。

最後に、丸い鳥たちの生息域についてだが、これは分かりにくい。この森の中の殆どの場所で見かけるからだ。少なくとも、この森の中全域では生息しているのだろう。卵には困らないから、そっちの方が嬉しいが……。

卵以外にも、山の幸が豊富に手に入ったことも嬉しい。木の根元にはキノコが沢山生えていた。中々美味しかったが、勿論毒キノコ等もあった。

普通に気分が悪くなり体力が落ちるようなキノコや、眠気を促すキノコ。身体が痺れて動けなくキノコもあった。……一番酷かったのは、爆発するキノコだろう。口の中で爆発した時は軽くパニックになった。

しかし、この獣の身体はかなり優れていたようで、抗体と言えは良いだろうか？ 抵抗力が備わるのが早く、最近——とは言っても、まだ目覚めて数日だが——では気分も悪くならないし、痺れないしキノコによる眠気も無くなってきた。……爆発はするので、赤いキノコは食べない。

キノコ以外にも、食べられる草や蜂蜜も見つけることができた。

……相変わらず殺すことは出来ないでいるけど、生きてはいけるようにはなった。でも、このままじゃ絶対にいけないだろう。

自分のような肉食獣がいるのだ。他に個体がいらないとは思えない。同じ種族でなくても、他の肉食獣だっているかも知れないだろうか……。

遭遇してしまったとき、どうなるか……。分かりきったことだ。

きつと……。殺される。

喰らう覚悟……。

殺す覚悟を決めなければ……。

生きていくために……。

捕食する者、される者

あれから更に数日が過ぎた。

相変わらず、卵と山の幸で腹を膨らませている。卵は脅かせば確実に産み落とすわけではないが、五羽脅かせば三個は大体手に入る。

一日に最低でも三〇匹は見つけるので、どんなに少なくとも一〇個は手に入る。それに山の幸を合わせれば、意外に腹が満たされるのだ。

餌を求めて散策を繰り返すうちに気づいたのだが、此処は森の中と言うよりも溪谷と言った方がいいようだ。

森を抜けると大きな滝が見える。更に散策範囲を広げると丘が見えて来た。丘の上から眺めると森よりも平野の方が目立つ。その平野も幾つかの滝に囲まれているため溪谷と呼んだ方がしっくりとくるからだ。

更に散策の際に気になる物を幾つか見つけた。一番高い丘の上に、ボロボロになった蜂の巣箱と吊橋を見つけた。吊橋は残念だけど、この身体を支える程の強度はなさそうだから諦めた。吊橋の向こうに何か有ったかも知れないと思うと残念な気持ちで一杯だ。それに平野には壊れた小屋？のような物も在った。この三つの人工物から、人間が近くで生活しているのかも知れない。吊橋以外は壊れているから、生活していたかにもなるが……。

それから毎日脅かして、山の幸を集めてと何だかんだで生活出来ていたのだけど、最近溪谷の様子が可笑しい……。丸い鳥たちの数が減っている……。それに警戒心が強くなっている気がする。前までは大きく一歩踏み込めば捕まえられるぐらいに近づいても、気づ

かれなかったのに、最近はこちらの視界に映った途端に逃げ出すようになってる。

卵は落としていくからいいのだけど……、やはり気になる。だけど、理由が分からない……。そのうち分かるだろうか？ と、楽観的に考えていたのが間違いだったのだろうか……。数日後に思い知らされることになったのである。自分以外の肉食獣の存在を……。

今日の散策は滝の方にしようと考えて、滝に向かう。

ズシンッ！　ズシンッ！

地面を揺らす自分の歩みにも慣れはじめてきた。今まで試してなかったけど、この獣の腕なら魚を取れるんじゃないだろうか？ と、考えてる。

……魚は抵抗なさそうなのに、鳥は殺せないんだなあ。

獲物の大きさが関係しているんだろうか？　どちらにしろ、魚なら大丈夫か試してみないことには分からないか……。考えながら滝に近づいて行く。

「ギャア！　ギャア！」

……………えっ？

微かに聞こえた鳴き声。丸い鳥とは違う初めて聞く鳴き声。空耳じゃない……。この獣の身体は自分には勿体ない程に優れている……。体力や腕力は勿論、聴覚だって優れている。だから、聞き間違うち

とはない。滝の音と共に、確かに聞こえた。

そして、その優れた身体は嗅覚も優れている。だから、嫌でも気づかされる……。

血の臭いに……。

その初めて見る生き物を茂みからそっと覗く。その生き物は二足歩行が出来るようで、器用に後ろ足で立っている。前足は未発達なのか、後ろ足より大分小さい、だが、鋭利な爪は変わらないようで、前足にも後ろ足にも付いている。身体は橙色の鱗に覆われているが、顔と頭部、更に背中から尻尾までは線のように薄紫色の鱗になっている。口は鳥のくちばしのように尖り、その口からは鋭い牙がノコギリの刃のようにびっしりと並んでいる。大きく口を開けられるようにか、くちばしのような口は根元から大きく裂けている。そしてあれはトサカなのだろうか？ いや、トサカと言うよりエリマキと言うべきだろうか。その大きさは顔全体の半分を占める程でかなり目立つ。

「ギアア！ ギアア！」

その生き物は七、八匹ぐらいで何かを貪っている……。爪や牙が遠くからでも分かる程に真っ赤だ。舞い上がる羽根が、喰われている物が何なのかを物語っている。

「ギアギアアッ！」

「ギアッ！」

「ギアア！」

急に食るのを止め、それぞれ鳴き出す。威嚇している感じではなく、歓迎しているという感じだ。

その鳴き声に応えるように、ゆっくりと奥から現れたのは、他の奴らよりも一回り大きい個体だった。爪も牙も更に鋭く、何よりエリマキがかなりの大きさである。大きさや他の奴らの態度から察するに、恐らくは奴らの群れのリーダーだろう。奴らの中心で悠然と構える姿は、その風格を現している。そのままリーダーも貪り始める。

その初めて見る生き物と初めての捕食行動を、じっくり観察せずに直ぐに逃げれば良かった。目の前で狩りが行われたと言うのに、愚かにも覗き続けたのがまずかった。

「ギャアアー!!!」 「ガアッ!？」

奴らのリーダーが食べ終わった直後の、遠吠えのような大きな鳴き声に、驚いて声を漏らしてしまった。

その漏らした声が小さかろうと、狩りの後で血に酔い、高ぶっている奴らが反応しないわけがない。

直ぐに十数個の瞳がこちらを見る。こちらの姿を確認した奴らは、リーダーを先頭にこちらに近づいて来る……。

ゆっくりと囲むように近づいて来る奴らに対して、逃げようにも身体が動かない! 恐怖に身体が竦んで動いてくれない。

恐怖に震えている内に、奴らに包囲された。いや、後ろは何故か空いている。前と左右だけに固まっている。

奴らはそれぞれに威嚇の声を上げてくる。そのまま、自分は動けない……。身体が震えが……。止まらない。

強者と弱者

……襲って来ない？

包囲されて暫く経った。いや、恐怖から時間を長く感じただけで、それほど時間は経ってはいないのかもしれない……。

相変わらず一定の距離を空け、こちらを威嚇するように吠え続ける。その威嚇の鳴き声を聞き続ける限り、身体の震えは止まりそうになり。

どうにかしたいが出来そうにない……。何もして来ないとは言え、後方以外を取り囲まれ、威嚇され続けている状況。自分にもう少し勇気が有れば、吠え返し、追い払えるのかもしれない……。

自分の身体は奴らよりも一回り以上大きい。群れのリーダーと比べても自分の方が大きいのだ。

膠着状態が続く中、ふと、とある考えが頭を過ぎる。

……！！
だからなのか……？

奴らが襲って来ない理由……。奴らは数では当然、勝っている上に、相対している自分は怯えている。当然、奴らの方が狩る側だ。

……だが、それは怯えている自分の考えだ。

奴らからすれば、見た目の恐ろしさと大きさだけなら、確かに自分たちよりも遥かに強暴そうに見えるのだろう。だから警戒し、威嚇の声を上げているのが限界なのかもしれない。

……勇気を出して、勢いよく吠えてみようか？ 一度だけ……。その一度だけで、奴らが自分を恐れて逃げていつてくれるかもしれない。

大きな声で吠えようと、ゆっくりと息を吸い、身体に力を込める。
……戦いになったら、自分は絶対に負けるだろう。未だに他の生き物を殺せていないし、今のままでは、これから殺せないだろう。そんな自分が奴らを蹴散らせるなんて思えない。

だから吠えて、恐れさせて……、奴らに逃げていってもらおう。大丈夫……、只、一声鳴けば良いだけだ。
さあ！ 吠えよう！

「グルウ「グギャアアー！！！」！？」

膠着状態を嫌ったのは自分だけじゃなかった……。奴らのリーダーも痺れを切らせていたんだろう。
威嚇に参加していなかったリーダーが咆哮した！ 自分の決しの覚悟の声は掻き消され、勢いを失った自分は奴の力強い鳴き声に恐れ、一歩だけ『後ずさって』しまった……。

「ギャッ！ ギャッ！」

「ギャアア！」

後ずさると言う、明確な怯え。

その瞬間！ 奴らの目の色が変わった。強者と勘違いさせていたメツキが剥がれ、見かけ倒しの弱者が奴らの視界に映っている。

目の前にいるのは……獲物だと！！

一方的な蹂躪劇が幕を開けた。

群れの中の二体、爪を振りかざして飛び掛かって来る！ 逃げようにも、身体が完全に竦んで動かない！
鱗に覆われている筈の右肩に鋭い爪が突き刺さる！

「――！！」

声にならない悲鳴が口から零れる。この身体になって初めて受ける明確な痛みに、無意識に身体が動き、後ろに跳ねる！

「ギャツ？」その無意識の反応が、飛び掛かって来たもう一体の攻撃から避けさせた。

……痛い！

どろりと血が溢れ出す感覚がする。奴らの前で右肩の傷に目を向けるわけにもいかず、奴らを視界に収め続ける。

「グギャウ！？」

グチュリ！！ と何かを食いちぎるような音がした。刹那、左脇腹が焼けるように痛み出す！ 何が起こったのかと目線を向けると、いつの間にか奴らの一体が食いついていた……。

「ガァァ！！？」

食いつかれたことに混乱し、狂ったように暴れる。
余りの暴れように、食いついていた奴が吹き飛ぶ！ 更に回りを囲んでいた奴らも警戒し、距離を取る。

に、逃げないと!!

逃避の一択しか頭にはなかった……。何処でも良いから逃げたかった。振り返り痛む身体に力を込めて、少しでもこの場から離れたかった……。

「グギヤアーオ!!」

だけど……背中を向けて逃げるような隙を、奴らが見逃す筈がなく……。

背後から、奴らの中でも一際大きな気配を放つ個体が背中に向かって飛び掛かって来るのを感じた……。

「ガア!? グウウ……」

背中に重量感の有る衝撃が当たった直後! ピシピシ、パキパキと言う音と共に視界がぶれる……。

ぶれたと思ったら、地面が近づいて来た。……いや、自分が倒れようとしているのだろう、身体が崩れ落ちるのを感じた。僅かに開いた瞳の先を、蒼い破片が降り注ぐ。

何処かで見たことの有る色……だな。ああ、……自分の鱗と同じ色だ……、破片ってことは……、砕かれたんだ……。

背中からどくどくと夥しい量の液体が溢れ、流れ出すのを感じる。

微かに奴らの鳴き声が聞こえる。理性はもう諦めている。自分は此処で死ぬんだと、理解し悟ってしまう。

この身体になって……、何も分からないまま、何も出来ないまま、死んでしまうのか……。

もう、身体を動かす気力もない……。目も開けていられない……。ゆっくりと……。視界が暗くなっていく。

完全に閉じる寸前、諦めた理性とは別に、本能が身体を震わせるのを確かに感じた……。

狩人の少女 その1

溪谷で一番高い丘の上で、少女が一人、座ってガラス瓶の中を掻き混ぜている。

余程集中しているのか、ガラス瓶以外には目もくれない。

その少女の傍には、白い猫が控えている。猫は二本足で器用に立ち、服も着ている。右手には猫の手の形をした棒を持っている。

更に少女と白い猫の周りを、白い猫と同じ格好をした、黒い猫が走り回っている。どうやら虫を追っ掛けているようだ。

ポン！ と、軽い音が少女の持つガラス瓶から聞こえた。少女は音のしたガラス瓶を視線と同じ高さまで持ち上げる。ガラス瓶の中の緑色の液体を軽く揺らし、じつくりと眺め、笑顔で頷き、傍にいる猫たちにその喜びの理由を伝える

「シロ！ クロ！ みてみて！回復薬グレートを調合出来たよ♪」

「お見事です。ご主人様」

「流石は姐さんなのじゃ！ この調子で量産するにゃ？」

少女の声に反応し、シロと呼ばれた白猫と、クロと呼ばれた黒猫が少女と喜び合う。

「そうだよね。回復薬グレートは一杯欲しいよね」

「ですが、ハチミツが足りません。何処かで採取しなければなりませんね」

「くぅ……！ すまにゃい姐さん！ クロがしくじったばかりに……。申し訳ないにゃ！」

「全くですね。農場の蜂蜜を食べ尽くすとか……。馬鹿なんですか？ 死ぬんですか？」

「そっ、そこまで言わなきゃっても良いじゃニヤいかニヤ！ だから、こうやって虫を追っ掛けて蜂蜜を集めようと頑張ってるのニヤ！」

その言葉が耳に届いた白い猫シロは、少女の傍を離れ、虫を追っ掛け回しているクロの方に向かう。手を伸ばせば届きそうな程に近づき、その名を呼ぶ。

「クロ？」

「何ニヤ？」

虫を追いつけるのを止め、自分の名が呼ばれた方に振り向く。振り向いたその顔に、シロの持つ先端が猫の手の形をした鈍器、ニャンニャン棒が打ち当たる！

「ニャブツ！？ ベチツ！」

小気味良い音と共に、クロの身体が文字通り飛ぶ！ 嬉しそうに微笑んでいた少女は空を舞う黒い猫の光景に一瞬固まり、徐々に顔を引き攣らせはじめる。その一方、空を舞わせた白い猫は当然！ と言わんばかりにドヤ顔を見せる。

「ク、クロー！？」

「ニャー……ニャプツ！」

墜落したクロに少女は慌てて駆け寄る。

駆け寄ったは良いが心配する気持ちだけが空回り、どうすれば良いのか？ と、あたふたとするだけだ。

「ニャ、ニャア……。あ、姐さんすまニャい……。クロは此処ですよニャらニャ……」

「ク、クロ!? しっかりして!」

「姐さんとの生活は、とても楽しかったニャ……。ユクモ村で桜を見る度に、クロって馬鹿野郎がいたニャって……。思い出して欲しいニャ……」

「クロ? 大丈夫だよ! 皆で、また一緒に見よう?」

「ニャウツ! む、迎えが来たようだニャ……。姐さん……。さよニャ……。グハアツ!?」 「とつとつ逝きなさい!」

今にも倒れそうな雰囲気を放ち、死にそんな言葉を紡ぐクロと、目を潤ませながら接する少女にいつの間にか近づいていたシロが、再びクロをニャンニャン棒で打つ! いや、むしろ殴っている。

「ぐぬぬう、二度も酷いニャ! って言うか、何で打つのニャ!?」

「クロがご主人様をからかうからでしょう? ご主人様もお優しいのは素晴らしいことです、簡単に騙されてはいけませんよ……」

「ふえっ……。クロは大丈夫なの? ……死なないの?」

「大丈夫ですよ。クロなら繁殖期の飛竜の巣に投げ込んでも大丈夫ですから」

「死んじゃうニャ! こんなプリティなクロは一瞬で喰われちゃうニャ!」

「よ、良かった……。クロが死ななくて」

シロの言葉と、その後の二匹のやり取りを見て安心したのだろう、少女は涙を溢れさせながらも笑みを浮かべる。

「姐さん、ごめんなさいニャ……。ちょっとした悪戯心からやってしまったのニャ」

その姿を見たクロは申し訳なさそうに謝る。『すまない』ではなく、『ごめんなさい』と丁寧に言っているから、本気で謝っているのだろう。

「ううん。クロが無事ならそれで良いよ」

「……い、痛いニャ！ 心にザクザクと突き刺さるニャ！ クロの良心がリベリオンニャ！ もう止めて！ クロのライフはゼロニャ！」

「はぁ……」

少女の言葉にクルものがあるのか、クロは胸を押さえて叫ぶ！ そんなクロの様子を見ていたシロは呆れたように溜め息を漏らす。実際呆れているのだろう。

「そ、そもそも最初にシロがクロを打ったから、こうニャったニャ！ 何で打ったんだニャ？」

いたたまれなさから逃げるかのように、シロを問い詰める。まだ胸を押さえてはいるのだが……。

「本気で聞いているのですか？ はぁ……、蜂蜜は何処で採取出来ますか？」

「……蜂の巣ニャ！」

「なら、ど・う・し・て！ 地を這う虫を追い掛け回しているのですか？ ツツコミ待ちですか？」

「さ、さっき蜂蜜を吸ってたニャ！ お腹が光ってたんだニャ！」

「……捕まえたのですか？」

「ダメだったニャ！ 逃げられたニャ！ てへぺろニャ」

ベチッ！！！！

三度目のニャンニャン棒から繰り出された一撃は特大の音を鳴らした！

「とつとと蜂の巣から採取して来て下さい！」

「ニャアー……！？」

「アハハハ……」

もう一度空を舞ったクロを眺めながら、少女は乾いた笑いを浮かべるのだった……。

狩人の少女 その2 (前書き)

ギルドマスターのお爺さんの口調が変でも独自設定と言うことで、
お許し下さい。

初の前書きが言い訳……。
穴が有ったら入りたいでせう……。

狩人の少女 その2

ユクモ村と言う名前の小さな村が在る。私はそこで生まれ育った。桜と温泉ぐらいいしか名物と呼べる物は無いけれど、村の人は皆優しく暖かくて、一人が困っていたら皆で協力して、誰かが亡くなったら皆で大泣きする。嬉しいことが有ったら、皆で喜び合う。そんな村が私は大好きだ。

そんな小さな村にもモンスターはやって来る……。小型のモンスターは村の大人たちが何とか追い払えたけど、大型のモンスターは難しい……。本の中でしか見たことはないけど、もしも『飛竜』と呼ばれるモンスターが現れたら……。

そう考えると夜も怖くて眠れなくて、お父さんとお母さんに抱き着きながら布団に潜り込む。気がついたら眠っていた。

そんな毎日が続いていたある日、ギルドと名乗る人たちがユクモ村に訪れた。

「どうしたあ、嬢ちゃん？ 泣いてると幸せが逃げるぞい」

そのギルドの人たちの先頭にいらっしやった、幼い頃の私よりも小さなお爺さんは不安で泣いている私を見て聞いてきた。

「飛竜が来たら食べられちゃうの？ お父さんもお母さんも皆食べられちゃうの？」

自分で言って自分で想像して、その恐怖から俯き更に涙を溢れさせ

る。両親が傍にいたら抱き着くのだけど、両親は仕事で今はいない。震えながら涙をポロポロと流す私の頭が優しく撫でられた。顔を上げると、お爺さんが背伸びをしながら撫でてくれていた。

「頑張ったない、嬢ちゃん。今まで恐かったろうよう？ 相手はモンスターだ。いつ、その脅威が向かってくるか分からないからね。ずっと、その恐怖に晒されていたんだろい？ だが、もう安心しろい。わしらに任せとけい！」

その言葉に思わず泣き止んだ私を見ながら、お爺さんはニカッと笑いギルドの人たちに振り返る。

「さあて！ ギルドの諸君！ わしらがやるべきことは決まっていたが、計画通りに進めるかい？」 「ご冗談を」

「直ぐにやりましょうや！」

「我らギルドが存在する理由のために」

振り返ったお爺さんの言葉にギルドの人たちが口々に応える。

「じゃあ、とつととやるとしようかい！！ 行くぞい！？」

「了解しました！！ ギルドマスター！！」

全員が息を揃えて言う。叫んでいると言うべき程の音量は村中に届く。

村の皆はその声にびっくりして、動きを止めていた。

その後、村の中が目まぐるしく変わっていった。ギルドの人たちはお爺さんを筆頭に嬉々として動き出した。村長と話し合い石段の上の温泉を貸してもらい、そこにギルドの集会場を建てる。更に一部の土地を開拓して農場を設ける。

ユクモ村の出入り口の周辺を警備してモンスターを発見したら、討伐もしくは撃退して道の安全を確保していく。

とてつもない速さで村が変わっていく……。良い方向に……。安心できるように。ギルドの人たちはそれこそ休まずに働いていた。朝も昼も夜も頑張っていた。大丈夫なのかと聞いたことが有る。答えはいつも一緒だった。

「ギルドがギルドで在る理由のためになら、幾らでも頑張れる」

ギルドが在る理由が分からず、何度か聞いたけど答えは返って来なかった。只、皆言うのが恥ずかしいような、でも誇らしいような顔をしていた。

最初は変わっていく村に戸惑っていた村の皆も、ギルドの人たちに協力を始めた。

男の人たちは運搬や建設など、力仕事を。女の人たちは炊き出しと言う食べ物一杯用意していた。子供は親の手伝いなど、できることをした。……。私もお母さんと一緒に炊き出しを頑張った。温泉について調査する仕事に就いていたお父さんは、村の温泉向上のためにそっちの仕事を優先することにした。

目まぐるしく変わる村の中で、いつの間にか私は不安が無くなり、泣かなくなった。

ギルドが設立されたからか、ハンターと呼ばれるモンスターを狩ることを生業とする人たちも訪れるようになっていった。そのハンタ

ーの人たちと商売するために行商人が訪れるようになって、武器を仕入れるお店やハンターの人たちが集めてきた物を加工するお店が出来て、周辺での狩りで生活していく人を常駐のハンターとして農場の一部を貸して契約をして、更に村が発展していった……。

お爺さんとの出会いから数ヶ月後、新しいユクモ村が誕生したのだった。モンスターたちの脅威に怯えなくて良い……安心できる村が……。

ギルドの人たちに聞いた話では、当初の計画では一年以上掛けて今の状態にする予定だったらしい。

でも、お爺さん——ギルドマスターと言うらしい——のあの言葉で計画が速まったらしい。あの言葉にはギルドの存在理由が含まれていたらしい。

相変わらず存在理由と言う物が分からず、ギルドマスターに聞いてみたことが有る。

でも、やっぱり答えは返って来なくて……。冗談混じりに、とつと終わらせて、ゆっくり温泉に浸かりたかったんだよい。と言われた。

……むう。

いつかきつと分かる時が来るのだろうか？

狩人の少女 その3

それから数年後……。この生まれ育った大切な村のために、私も役立ちたいと思う気持ちと、村を救ってくれたギルドの方々が言うギルドの存在理由を知るために、ハンターになろうと決意した。

その存在理由がなくても、結果的には村は救われた。だけど、その存在理由は数年前の私を恐怖から救ってくれたんだ。あの時の私が救われたように、今度は私が誰かの恐怖を取り除けるように。

両親にハンターになると、自分の正直な気持ちを伝えた。

反対されると思ったけど、二人ともお前が自分で決めたのなら反対はしない。……正直な気持ちを言うとお前のことがとても心配だけど、お前の意思を尊重したい。自分が納得できるように進みなさい。頑張れって言ってくれた。

……その時は涙が溢れそうになるのを、我慢するのが大変だった。その後、ギルドマスターのお爺さんをお願いして、ハンターとしての最低限必要な知識と心構えを教えてもらった。

……ギルドマスターは最初はびっくりしていたけど、私が真剣だということが伝わったのか最後には、

「ようこそギルドへ！ 未来を担う若きハンターよい。わしらギルドの職員と、全てのハンターが、君を歓迎するぞい！」

と、認めていただけた。……その後の集会場にいたギルドの職員と、ハンターの方たちからの歓迎の拍手はやり過ぎだと思ったけど。……恥ずかしかった。

その後、ギルドマスターからアイルーと言う猫さんを紹介していただいた。アイルーは人間と共存してくれる猫さんらしく、狩りも料理も出来るらしい。

お供をしてくれるアイルーは、アイルーを斡旋してくれるお婆さんがおられるらしく、本来はお婆さんをお願いしないといけないらしい。

あれっ？ この子たちは……？

珍しいことに、お婆さんを経由していないらしい。

違いが分からないだけだったので、気にしないことにした。可愛いし、初対面なのに何故か慕ってくれているから……。

名前はまだ無かったようで、名付けて欲しいと言われたから、悩みに悩んで黒いアイルーはクロで、白いアイルーはシロって名前を付けた。

……涙を流していたけど、よっぽど嬉しかったんだろうか？

それから更に数ヶ月後、クロとシロと一緒にハンターになるための勉強と訓練を終えて今、私は此処にいる。

……まだガーグアだけしか狩れてないけれど。

ガーグアと言うのは、この溪谷全域に生息している鳥の名前。臆病だから、直ぐに逃げ出してしまふ。気づかれないように近づいて驚かせると卵を生み落とすという、変わった鳥。

ちなみに私でも狩れる理由は、……ハンターの訓練中に頑張りました。

村を害するわけじゃないから、極力狩りたくないけどね。

「……………ご主人様？ もうそろそろ、戻って来ていただいてもらえますか？」

「ひう！！？」

「ニヤッ!？」

急に話し掛けられてびっくりしちゃって、思わず変な声が出ちゃった。

あつ! でも、シロがニヤッ! と言うのが聞けた。シロは礼儀正しいから、滅多に聞けないんだよね。

ニヤッ! って言うの、可愛いのに……。

……ん?

「シ、シロ……? もしかして私、口に出してた……?」

「………はい」

「ど、何処から……何処まで?」

「………ギルドが設立される前から、私が言葉をかけるまで……です」

「全部だったよー!!!!」

全部聞かれてたよ……。うう、恥ずかしい……。

「それとその……、口調が変わっておられましたよ? 最後の方は戻っておられましたか」

「心の中での独白のつもりだから、頑張ってたんだよー! 最後の方の口調が戻ってたの……自覚はしてる……」

き、消えちゃいたい……。

「そ、そういえば、ギルドの存在理由……何なのでしょね?」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしてる私に、いたたまれなくなったのか話題を振ってきた。

……大丈夫だもん。もう、恥ずかしくないもん。……ううー。

「うゝ……コホン！　そ、その答えは実は数ヶ月前に出てたんだよ？」

「本当ですか？　何だったのでしょうか？」

何とか調子に戻してシロに応える。シロは私の言葉に驚いたように目を見開く。

「ギルドは力の無い人たちを守るために在るんだよ。モンスターや、その他の脅威に怯える人たちを安心させるために、皆が笑っていられるように」

だから、あの日の泣いている私を守ろう見て、頑張ってくれたんだよ。泣かなくても良いように。少しでも早く、安心出来るように。

「考えるまでもなかったんだよ。教えてもらう必要もなかったんだよ。誰だって当たり前に思えることだもん。ハンターになると決意した時には自分で答えを言っていたんだから」

守りたいと思う心の現れこそがギルドというモノとなって存在するんだろう。

「……そうですね。悲しませたくないから、守りたいから頑張る、至極単純で当たり前のこと。それがギルドが在る理由。確かに、考える必要も教えてもらう必要も有りませんね」

「うん！　そうだね。あーすっきりした。考え過ぎても駄目なんだね」

「そうですね」

「よし！　とりあえず、今出来ることから頑張ろう！」

「はい！　お供いた「採ったニャー！！」……」

シロの言葉を遮るようにクロの声が聞こえた。
あっ……シロが肩を震わせてる。に、逃げてクロ！

その後、本日四度目のニャンニャン棒がクロに放たれました。ごめんねクロ……。止められなかったよ。

……殴られるのが、快感になってきたニャ……。

！？　クロ！？　そっちの世界に行っちゃ駄目！　戻って来て！

出会い その1

「まったく……、クロは空気を読むべきです。けーわいですよ?」
良い話が台無しです。

「駄目ニャ。もう……心が折れたニャ。クロは新世界に旅立つのニャ。ドM王にクロはなる! ……ニャ」

「クロ!? 新世界が何なのか分からないけど、その先には行っちゃ駄目だよ!」

「偉大なるドM王、タヤロウ・コノブが言っていたニャ……。新世界の果てに、この世の全てを置いてきた……と」

「その人誰!?」

「……強く殴り過ぎたのでしょうか? もう一度打ったら治りますかね?」

「そう思い、ご主人様とクロの傍に向かいま……す!!?」

「ご主人様!」 「姐さん!」

「ふえっ!? な、何? どうしたの?」

……明らかに空気が変わりました。反射的に身体が動き、ご主人様の傍で得物を構えます。横にはクロが同じように構えています。ご主人様は私たちの突然の動きに驚き慌てています。

ご主人様よりも種族的に嗅覚や感覚が優れている私たちは、その空気の变化をご主人様よりも早く気づけました。

濃厚な血の臭いに……。

「近づいてるニャ？」

「そうですね……。しかし、臭いのする方向は……」

「崖ニャ」

「???」

構えたまま話し合う私たち見ながら、状況が分からず困っておられるご主人様に説明します。

「崖の方から血の臭いが近づいて来ています。恐らく、モンスターでしょう」

「ええ！？　だ、大丈夫なの？　キャンプに戻る？」

「ですが、血の臭いの濃さに比べると、気配が弱々しいですね……。手負いなのかも知れません」

「もし、大型のモンスターでも、手負いニャらクロたちでも討伐出来るかも知れニャいニャ」

「た、戦うの？」

「ハンターなら、大型モンスターとの戦闘は避けては通れません」

「ニャによりも、村を害するモンスターだったら、一大事ニャ」

「あっ……、そう……だよ。私たちはハンター……。守るために在るんだよね」

ご主人様にも覚悟していただけたようですね。

「では、身を隠しましょう。……あの蜂の巣箱の後ろが良さそうですね」

「うん！ ……ん？ 隠れるの？ 戦わないの？」

「本当に手負いニャら討伐したいニャ。でも、万が一気配が希薄ニャだけで、血も返り血なだけだったら危険ニャ」

「更に、手負いでも強暴なモンスターもいます。まだ私たちは見たことが有りませんが飛竜などがそうですね」

「クロたちはまだまだ未熟ニャ新米ハンターと新米お供アイルーなのニャ！ 相手がニャンニャのかも分からニャいのに、待ち構えるのは無謀と言う物ニャ！」

「姿を確認して、手に負えないと思ったら、直ぐに村に戻り、ギルドに報告をして対処を検討していただきますよう」

クロと交互に説明します。……頭が悪そうな言葉と行動ばかりが目立ちますが、考えてはいるんですね。……少し、見直しました。

「な、成る程……。シロもクロも凄いね」

「ニャッフッフ……。全ては、タヤロウ・コノブの教えニャ！」

「だから誰なの！？ むしろ、その世界引っ張り過ぎだよ！？」

………前言を撤回します。やはり、クロはどうしようもない大馬鹿野郎ですね。

気配の主が姿を現す前に、素早く隠れます。ご主人様もクロも緊張しているようです。……私も緊張しているようです。

ズシン！ と、丘が震えるのを感じました。その音から、大型のモンスターだと理解させられました。

そつと……、枯れ木に空いた穴から、覗きます。

「うわぁ……『赤い』……」

ご主人様がそのモンスターを見つめ、そう呟きました。

そう、そのモンスター——獣と呼んだ方がしっくりきますね——は真っ赤に染まっていました。本来なら蒼い色の鱗で覆われているだろうその身体は、多量の血で染まり、蒼い色を探す方が困難な程に……。

右肩が傷付いているのでしょうか？ 右肩への負担を嫌うかのように引きずり、左脇腹からはとめどなく血が溢れています。

更に身体の上……その巨体故に見えませんが、恐らくは背中かその周辺に大怪我を負っているでしょう……。その傷口から流れ出る血が、身体全体を赤く染め上げているようです。尻尾の先にまでも血が付いていますね。

あの大怪我で崖を跳んだことで力尽きたのでしょうか……。ふらつきながら数歩だけ足を進めるも、倒れるように地に伏せ、弱々しい呼吸を繰り返しています。

「……目が可笑しいニャ。何処を見てるか分からないニャ」

その言葉に、血染めの身体ばかりに目を囚われていた私は、獣の瞳に目を向けました。倒れ伏したその獣の、焦点の合っていない二つの瞳が映ります。その瞳が獣の命が失われそうなのだと、私に告げてきました。

「手負いのようニャ。……討伐するニャ？」

「クロ、ちょっと待って下さい。……ご主人様。私はギルドにあるモンスターの資料を何度も閲覧しましたが、あの獣は見たことが有りません。恐らく、新種かと……」 「ニヤら、捕獲するニヤ？ それとも、倒れた後に運ぶニヤ？」

「……新種なの？」

「はい……恐らくは。新種ですと報告するだけで報酬がもらえるかと思えます」 「新種ということは、今まで誰も遭遇したことが無いんだよね？」

「はい。少なくとも資料には有りませんでしたので、可能性はあります」

「……………誰も見たことが無い……。初めてのモンスター……」

「……………ご主人様？」

「……ご主人様は何かを考えておられるようで、じつと虚空を見つめています。」

「ねえ……………シロ？ クロ？ 我が儘を聞いてくれるかな……………？」

出会い その2

奴らがじわじわと距離を詰めて来る。

右肩は痛みで上げられず、左脇腹の痛みから身体に力を込められない。切り裂かれた背中から絶望と無力さを教えられ、目の前に散らばる碎かれた鱗が、生の終わりを告げる……。

理性が諦めるのを感じながら、眠りへと誘われる……。

だが、獣の本能は諦めてはいなかった！ 意識が途切れそうになりながらも、目だけは奴らを睨み続ける。地に横たわりながらも睨み続ける中、バチバチと何かが爆ぜるような音が尻尾の先から小さく聞こえてくる……。

その尻尾が、とどめを刺そうと近づいて来ていた奴らのリーダーに向かって動き、その顔に叩きつけられる！

「デヒュッ!？」

リーダーは奇声を上げながら跳ね飛ばされ、飛ばされた先に有る岩にぶつかり、そのまま小刻みに身体を震わせたまま動かない。

瀕死の獲物からの突然の反撃と、リーダーが気絶したことに奴らは呆然としている……。その隙を突くように身体が動いた。野性の生存本能からの無意識の動きだったのだろう。自分の身体なのに操られているかのように勝手に動くのは違和感以外を感じない……。

リーダーが気絶させられたことで警戒をしているのか、奴らは追って来なかった。

逃げる自分の身体がふらついているのが分かる。無意識のまま残りの体力を振り絞って走っていたようだったが、徐々に身体の動きが鈍ってくる。

最後の力で丘の上にまで飛び跳ね……、そして力尽きた……。

……目が覚めた。まだ覚醒していない朦朧とする意識の中、無意識に空を見上げる。

そこには綺麗な満月が浮かんでいた。

「綺麗な満月ですね？　思わず夜桜を見物したくなってしまうです」
「グルッ!？」

鈴の音のように澄んだ高い声が、呆然と月を眺める自分の近くで聞こえた。

!？　……声が聞こえた？

一瞬にして頭が覚醒する！　バネ人形の如く跳ねるように起き上がり、即座に声のした方を向き身構える。

「警戒しなくても何もしませんよ？」と言っても、あの瀕死の状況からの目覚めですからね、身構えてしまうのは当たり前ですね。怪我の具合はどうですか？ 血の流し過ぎでしたから、暫くは身体が重いでしょうが、我慢して下さいね」

鈴の音のような声で聞いてきたのは白い猫だった。

猫は二本足で立ち、服を着ていた。服装はポンチョと言えば良いのだろうか？ 一枚の黄色い布に開いた穴から首を出しており、紐を使って腰の部分で結んでいる。

正面からは見えにくいのが、棒のような物を背負っている。先端は猫の手の形をしていた。……肉球まで有り、無駄に芸が細かい。

「んっ？ どうしました？ ……ああ、この服が気になりますか？

ご主人様の手作りなのですよ。私がお供アイルーの服は、オス向きの服しかないと落ち込んでしまった時に作って下さったのですよ。防水、防寒は勿論のこと、ヒラヒラとしているように見えますが、身体の動きを阻害しないため、機能性にも優れています！ 良い装備でしょう？」

問われたことにも反応せず——できなかったとも言う——じっと見つめていた自分に何を思ったのか、服の解説をしてくれた。

「あっ！ ……………」

「……………ガウ」

服について嬉々として解説したことを、話終わってから恥ずかしく感じたのか頬を赤く染めて俯いてしまう。饒舌に楽しそうに話していた自分に自己嫌悪するように、プルプルと震えている。

そんな彼女？ に、どう反応したら良いのか分からず困ってしまい、

吐き出すように一声鳴く。

「うう……、そによ。……コ、コホン！ な、名乗るのが遅れましたね。私の名前はシロと申します。貴方は言葉を話せたり出来ますか？」

「ガウウ」

何とか立ち直った白い猫、シロが名乗ってくれた。会話が出来るかを尋ねてきたので、話せないが言葉は理解出来ることを知らせるため、左右に首を振る。

「成る程……。話すことは出来ませんが、こちらの言葉は理解していただけるようですね」

「ガウ」

「続けてお聞きしますが、傷の具合はどうですか？」

自分が理解出来ていることが分かってもらえたようだ。続けて言われたことは、最初にも聞かれた傷について。そこで漸く気づく。

……傷が治っている！？

右肩と左脇腹に目を向ける。鱗が剥がれていたり、輝が走っているが肉への傷は塞がっていた。背中では自分では確認出来ないが、痛みが無いことから同じように塞がっているのだろう。

「大丈夫ですか？」

「ガウ！」

「それは良かったです」

傷が治り、喜んでいる自分を見て一緒になって喜んでくれている。その様子から、傷の手当をしてくれたのは彼女だと理解した。

「グルルウ、ガウ！」

「うん？ 傷の治療のお礼ですか？ 気にしないで下さい。助けるのを決めたのはご主人様です」

お礼も伝わったらしい。それと自分が助かったのは彼女のご主人様のおかげらしい。

……しかし疑問に思う。

何故、そのご主人様は自分を助けてくれたのか？ 見た目だけは強暴そうな自分を怖がって、とどめを刺そうとするのなら分かるけれど、手当するのは可笑しい……。

「何故、助けたのかと疑問に思ってますね？ そのことについて、ご説明しま「シロー！」……ご主人様が戻られたようですから、皆でご説明いたしますね」

そう言って、シロは声のした方に目を向ける。自分もそれに釣られるように目を向けた先に、この世界で初めてみる人間の姿が在った。その人間の少女はシロと同じ服装の黒い猫と一緒に、こちらに向かって走って来ていた。

この日

月明かりが淡く照らす丘の上で

共に在り続ける
大切な仲間たちと出会えたのだった

シロー！ わぷっ！？

あ、姐さん！？ しっかりするのニャ！
い！ 衛生へーい！ 衛生へー

ご主人様……

ガウ……

出会い その3

「うー……。痛いよう、恥ずかしいよう……」

コケた時に打ち付けたのだろう、少しだけ赤く染まった額を摩りながら、少女と黒い猫はこちらに向かって近づいて来る。

この世界で初めて見る人間は……小さかった。

いや、恐らく少女の身長は平均ぐらいは有るのだろう。しかし、獣の目線では低く見えてしまう。なまじ人間の常識を持っている自分としては、見下ろすように見ているとどうしても低いと思ってしまうのだ。——相手が大人だと分かっているにもかかわらず低過ぎる身長だと違和感が有る——端的に言えばそんな感じだ。余計分かり難い？

……すまないが、何となく察して欲しい。……自分は誰に言っているんだろうか。

「依頼は間に合いましたか？」

「ばっちりニャ！ 特産キノコ八個納品完了。依頼成功ニャ！」

「でも、遅くなったから、ギルドマスターや皆に心配させちゃった」

「ハンターとしての初の依頼でしたから、余計に心配だったのですよね」

「そうだね。暫くは早く帰れるようにしないとね！

……それで、獣さんは……」

「言葉話すことは出来ませんが、こちらの言葉は理解していただけます」

「そうなんだ……。あっ、あの！ は、初めまして！ えっと……怪我はもう大丈夫？」

その声に改めて少女を見つめる。年齢は十の半ばぐらいだろうか。艶の有る黒い髪を肩にかかる程度の長さで切り揃えている。とてもサラサラなようで、走って来たのに少しも乱れてはいない。ぱっちりとした目は本来は愛らしさを伝えてきそうだが、今は痛みと恥ずかしさから潤んでいて、見る人によってはイケない気持ち呼び起こしそうだ。

小さな鼻は高すぎず、控えめにちよこんとしている。

口も同じく小さくて、桃色の花の蕾を思わせる。ぷるんとした花びらのような唇が少女の持つ愛らしさを更に引き上げる。華奢な体つきだが痩せ細っているわけではなく、肉がつくべき箇所にはついている。肌もうっすらと焼けていて、全体的に健康で快活そうな印象を与える。

胸は残念な「獣さん……何か変なこと考えてる？」……。

「姐さん、どうかしたのニヤ？」「うん。何かね、変な感じがしたんだよね。気のせいかな……って、それより獣さん大丈夫？」

「傷はもう塞がっています。一番の深手でした背中の傷も大丈夫みたいですよ？」

「ガウ」

「そうなんだ……。良かった」

もう一度聞いてきた傷の具合を、代わりにシロが答えてくれる。それを裏付けるように一声鳴くと、少女は安心したように微笑む。

「あんたの怪我を見た姐さんは、治療中にニヤきまくりだったニヤ」

「あー！！ 何でそれを言うのー！ 忘れてー！」

「ガウ？」

「貴方の姿を見た時に、ほぼ全身が赤かったので、ご主人様は貴方の毛や鱗の色が赤だと思ったんです。

でも、実際は傷から溢れ出ている血で、そのことに気付いてからは

痛々しさから泣いてしまったのですよ」

「うう……。だってあんなにも血が出てる何て分らなかったんだもん。血の臭いにもシロたちのように敏感じゃないし、見習いハンターだからまだ血に慣れてないし。そ、それでびっくりしてつい……」

「???? 違うのニャ。回復薬グレート調合しながら、痛いよね？ 痛いよね？ 直ぐに助けるから頑張ってね？ って言ってたニャ」

「ご主人様は優しいですから、痛々しさに涙が自然と出ていたのですよ」

「うわーん！！ は、恥ずかしくて死んじゃう……。ううー」

どうやら少女は瀕死の自分の痛々しさと苦しみから、泣いてくれたようだ。

感謝をしていることを伝えたいが、伝えたい相手である少女は、暴露されたことによる羞恥心から悶えている。

……………どうしようか。

暫く待っていると、少女が何とか立ち直ったようだ。
改めて感謝を伝えようと、一声鳴く。

「うん？ お礼……。かな？ 気にしないでね。私が勝手にしたことだから」

「それに下心も有ったのことニャ」
「グルルッ？」

やはり何か目的が有るらしい。当たり前の話ではある。
何か無ければ、誰が好き好んでこんな獣を助けようと思うだろうか。

「えっと、その……ね？ ……うー」

言い難いことなのだろう、顔を羞恥に悶えていた時のように赤くして、ぼしょぼしょと呟く。 もじもじと上目遣いで見つめてくる。

「姐さん頑張るのニャ！」

「大丈夫です。彼はきつと承諾してくれます」

猫たちから励ましの言葉が聞こえる。何を言われるというのか、全く分からない。

唯一考えられた答えは、『捕まって欲しい』だ。さっき見習いハンターと少女は言っていた。

……ハンター。狩人である。此処にはまだ一月程度しか住んではないが、自分のような獣を他に見たことがない。

もし、自分がこの地域でイレギュラーな存在——新種や外来種など——なら、捕獲して研究などをしたと思うだろう。

そう考えていたが、あの少女の態度が違っていると伝えてくる。

それに捕獲する気なら、治療だけして縛り上げればいいだけだ。目覚めるのを待つ必要もない。

……ますます分からない。相手は恩人だ。恩返しをするためにも覚悟を決めよう。……捕獲とか、どうしても無理なら逃げよう。

……今度は無傷で逃げると良いな……。

「そのね？
とっ、友達になって下しやい！！！！
うう……舌噛ん
らあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091ba/>

狩獵物語

2012年1月9日20時48分発行